



## 書名：プー横丁にたった家

作：A.A.ミルン

絵：E.H.シェパード

訳：石井桃子

出版社：岩波書店

出版年月：2008年2月

総ページ数：191ページ

ISBN：9784001155860

推薦者

塩路晶子

鳴門教育大学大学院准教授

幼年発達支援コース

プー、クリストファー・ロビン、イーヨー、トラー、・・・みなさんにおなじみのキャラクターですが、彼らの「物語」はおなじみではないかもしれません。例えば、「プー横丁にイーヨーの家がたつお話」「トラーが森にやってきて、朝ごはんをたべるお話」「捜索隊がそきしされて、コブタがまたゾゾに会うお話」・・・。

『プー横丁にたった家』は、A.A.ミルン作「The House At Pooh Corner」の石井桃子による翻訳です。20世紀初頭のイギリスの劇作家・随筆家であったミルンは、子どもの本を4冊出版していて、そのうちの最後の本がこの『プー横丁にたった家』です。

プーたちは、森に住んでいます。『プー横丁にたった家』に描かれるプーやクリストファー・ロビンの森での様子は、楽しい歌や詩、勘違いや思い込みなどを織り交ぜて、季節の折々の生活や遊びがユーモアたっぷりに描かれています。

そんなある日、クリストファー・ロビンが行ってしまう時がおとずれます。『プー横丁にたった家』の最後の場面です。

「クリストファー・ロビンは、いってしまうのです。なぜいってしまうのか、それを、知っている者はありません。・・・」(173頁)

「『プー、きみね、世界じゅうでいちばん、どんなことをするのがすき？』・・・『ぼくも、そういうのはすきだ。』と、クリストファー・ロビンはいいました。『だけど、ぼくがいちばんしてたいのは、なにもしないでいることさ。』」(183頁)

「『ああ、そうか。』『ぼくたちがいまやってることが、なにもしてないことさ。』『ああ、そうか。』と、プーはいいました。『ただブラブラ歩きながらね、きこえないことをきいたり、なにも気につけないでいることさ。』『はあ！』と、プーはいいました。・・・きゅうにクリストファー・ロビンは、世のなかのいろんなことについて、プーに話しはじめました。王とか、女王とか呼ばれる人びとのこと、分子と呼ばれるもののこと、ヨーロッパという場所のこと・・・」(186-187頁)

「『ぼくーあのね、ぼくープー！』『クリストファー・ロビン、なに？』『ぼく、もうなにもしないでなんか、いられなくなっちゃったんだ。』『もうちっとも？』『うん、少しはできるけど。もうそんなことしてちゃいけないんだって。』」(189頁)

さて、クリストファー・ロビンはどこへ行ってしまうのでしょうか。

みなさんにもおとずれたことがある(かもしれない)この日のことを、『プー横丁にたった家』を読んで思い出してみてください。

